第四十八回「全日本中学生水の作文コンクール」

広島県優秀作文集

令和八年

広島県土木建築局

目　次

優秀賞

水を守ることとゴミの分別の関係　広島県立広島南特別支援学校中学部　三年　川原咲菜

蛇口のむこうに続く一本道　福山市立福山中・高等学校　一年　新田彩

宇宙と大地をつなぐ「一滴」の記憶　広島大学附属福山中・高等学校　三年　新田晃平

入選

私のこだわりと気持ち　広島県立広島南特別支援学校中学部　三年　沖田蒼介

人と水の関係　学校法人盈進学園盈進中学校　二年　北晃司郎

白いお米　学校法人盈進学園盈進中学校　二年　中島瑞葵

MNC　近畿大学附属広島中学校東広島校　三年　信木亨治

広島の水の未来　学校法人盈進学園盈進中学校　三年　原田祐埜

「命は僕の原点」　学校法人盈進学園盈進中学校　三年　松川莉大

心のすみか　広島県立広島叡智学園中学校　三年　村上ゆき

優秀賞

水を守ることとゴミの分別の関係

広島県立広島南特別支援学校中学部　三年　川原　咲菜

水がなければ困難になること、いろいろあると思います。私は自然が好きです。森や植物や虫、動物といった美しい生き物に心を奪われます。人間も含めた生き物に水がなければどうなるのでしょうか？

いろいろな疑問が生まれる中、ふと記憶の端にあった思い出がよみがえりました。小学部を卒業するまで住んでいた家の近くに川がありました。自分は生まれつき聴覚障害がありその地域の学校とは違う、別の遠くの学校に通っていました。近所や地域の人と関わることを避けて友達もいませんでした。そんな私は夏によく一人で川に行って遊んでいました。自転車に乗って二十分で着く距離でした。そこは中央公園の川なので、たまに他の子供たちが遊んでいるときもありました。その時は仕方なく遊ばずに帰っていましたが、サンダルを脱いで裸足で川の中に入ったり、石の上を歩いたり、川を上ってトンネルをくぐるところまで行ったりもしました。今考えると、小さな子供が一人で川に行くことは背筋が凍るほどに危険なことでした。川の流れる方向に進み、壊れたフェンスを見つけて、そのフェンスを越えて進んだことがあります。奥まで歩く途中に空き缶やビニール、ペットボトル、紙ごみを多く見つけました。これらがさらに向こうの河口を通り流れて海に出ていくのでしょう。そして、それを魚たちが食べ、漁業関係者が魚を捕り、人間が食べます。気味が悪いと少し思いました。どうして空き缶やビニール、紙ごみをポイ捨てする人間がいるのでしょうか。どんな理由があっても私は納得できません。

生き物の体の中には水があり水が無くなってしまえば生きることが出来ずに人間や動物、植物、微生物までもが地球から消えてしまうでしょう。調べてみれば水は生命維持のすべてに必要とされています。「生命・気候・生態系すべてを支える”地球の心臓”であり水がなくなれば生命ゼロの乾いた惑星となる」と書かれていました。つまり短い時間ですべての生き物が絶滅してしまうということです。

そして私にできることは何があるのかと考えました。家の水道と電気を節約すること、ポイ捨てしないこと、ゴミ置き場をしっかり閉めること、洗剤を使いすぎないことがあります。他にも、Tシャツを一枚作るのには二千七百リットルの水が使われていると知ったので、服を大切にすること、リサイクルに出すこと等でも水を守ることができるのではないでしょうか。そして自分の母は毎日同じ二リットルのペットボトルを使い回して作ったお茶を入れています。ペットボトルを作るときも大量の水が使われています。母はそれを知ってやっているのか、お茶を買わずに作るからそうしているだけなのか、どちらかは分かりません。どちらにしろ、これでも水を守れていると気付きました。

燃えるごみと燃えないごみの分別方法を知ることも、水を守ることに繋がっているのではないかと考えました。調べてみると予想は合っていました。調べた中で一番驚いたことはゴミ処理の工場で、燃えないごみの中に燃えるごみが混ざっていると洗浄、処理をするためにより多くの水が使われているということです。私は家庭ごみを正しく分別できず、母によく

「間違えている。」

と言われます。今まで

「えー、よう分からん。」

と少しいらだっていましたが、ごみの分別を間違えると人間を含む生き物にも地球にも迷惑をかけることになると知ると、申し訳なく思いました。限りある資源である水と豊かな自然を守るためにも、ごみの分別を間違えないように、捨てる前に聞いたり調べたりして、正しく捨てようと考えて行動します。

優秀賞

蛇口の向こうに続く一本道

福山市立福山中・高等学校　一年　新田　彩

自分の力で、あの美ら海水族館に行ってみたい！

私の冒険は、小学校を卒業したばかりの、少し長めの春休みに始まった。仲間と共に自電車で沖縄を一周する、十二日間で五百キロメートルの旅だった。春先でも南国の紫外線は強く、照りつける太陽の下で何度も現れる険しい坂道に息を切らし、足が止まることもあった。けれど、そんな私の喉を潤してくれたのは一本のボトルに入った水だった。ゴクゴクと喉を鳴らして飲むその一口は、どんな飲み物よりも幸せな味がした。

旅の途中、私たちはテントを張って、透き通った青い海に飛び込んだ。念願の水族館では、巨大なジンベイザメが悠々と泳いでいた。旅の終わりには仲間のお宅にホームステイをさせてもらった。沖縄の豊かな自然に包まれている毎日を過ごしていたが、その家のおじいさんが語った言葉に、その幸福は一瞬で凍りついた。

「沖縄じゃあよ、水は宝物さぁ。わったーの悩みよ。」

おじいさんが話してくれたのは、PFASという化学物質による汚染水の話だった。米軍基地の周辺などで検出されているらしいその汚染は、人々の「命の水」を脅かしている。蛇口をひねれば、いつでも安全な水が出てくる。それが日本の「当たり前」だと思い込んでいた私にとって、それは衝撃だった。水族館の水槽を満たす水も、私が道端で飲んだ水も、すべてはこの島の大切な資源だ。それが知らないうちに汚されているという事実に、胸が締め付けられた。

旅から戻ったある日、我が家のガレージで水道メーターの交換作業が行われていた。作業員の方の後を追うと、そこには土埃をかぶった鉄の蓋が埋まっていた。以前、水道局へ社会見学に行った際に、「飲み水の目印は青い蓋だよ」と教わったことがあったが、目の前の蓋の色はグレーだった。思わず尋ねると、作業員のおじさんは、

「ここは車が乗る場所じゃけぇな。壊れんように頑丈な鉄の蓋を使うんよ。それに最近は見た目に合わせて目立たん色にすることもあるけぇな。」と優しく教えてくれた。

気になって調べてみると、水道管の蓋の色は役割ごとに色分けされているのだという。消火栓は赤や黄色、下水道は茶色やグレー。そして飲み水には信頼の証として青色が使われることが多いようだ。また、水道メーターには「計量法」という国の法律で八年の有効期限が定められており、こうして新しいものへと交換し、正確さを守り続ける義務があることも知った。誰に気づかれなくても、街のあちこちでこのバトンタッチが繰り返されている。その地道な積み重ねこそが、安心して水を使うための見えない約束だったのだ。沖縄で水を守ろうと切実に願う人々がいる一方で、私の足元では、こうした静かな仕組みによって水の安全が支えられているのだと、深い感謝の気持ちが生まれた。

これまで私は、蛇口をひねれば水が出ることを当たり前のように思っていた。けれど、沖縄で聞いた汚染の不安やメーター交替をして支えてくれる人の存在を知り、水はかけがえのない貴重なものだと気づかされた。

私は早速、お風呂のシャワーヘッドを節水タイプのものに替えてみることにした。すると、翌月の水道メーターの数が減り、水道料金が千円ほど安くなった。この具体的な数字が変化したことは、社会の一員として小さな自信になった。

私は「グレーの蓋」を忘れない。次に蓋を交換する時まで、蛇口のむこうに続く未来を守る「一本の水の道」を担う一員として、私はこれからも力強くペダルをこいで進んでいける人でありたい。

優秀賞

宇宙と大地をつなぐ「一滴」の記憶

広島大学附属福山中・高等学校　三年　新田　晃平

夜空を見上げるとき、僕たち天文部の部員は、光年という気が遠くなるような距離の光に思いをはせる。先輩から、大学にある立派な天文台で巨大な望遠鏡を見に行けると聞き僕は中学一年の春、テニス部との兼部で天文部に入った。コートで汗を流した後、真っ暗な屋上で夜景を眺めながら星を追う時間は、僕にとって唯一の「静」の時間だった。

僕の「水と宇宙」を巡る思考の旅は、中学一年の夏、種子島から始まった。宇宙センターの巨大なロケット発射台を見上げたとき、人類が科学の力で宇宙へ飛び出そうとする強い意志に圧倒された。しかし、その足元に広がっていたのは、どこまでも平らで、強い日差しに照らされた大地だった。ガイドの方からこの島では水が貴重で、貯水槽にためた水が、生活を支えていると聞いた。さらに、三月の半ばにはもう田植えが始まることもあると知り、同じ日本でもこれほど自然の条件が違うのかと驚いた。最先端の科学と、限られた水と共に生きる現実。その対比が強く心に残った。

その後、僕たちは屋久島へ渡った。そこは、種子島とはまったく違う世界だった。「一ヶ月に二十五日雨が降る」と言われるほど水に恵まれ、山々から流れる水が森を潤していた。白谷雲水峡で見上げた弥生杉は、三千年という歳月を生き抜いていた。

しかし、旅を終えて帰宅した直後のことだった。観測史上最大級といわれた台風が島を襲い、僕たちが目にしたあに弥生杉が、根元から折れてしまったという知らせが届いた。三千年を生きた命を一瞬で終わらせたのは、その命を育ててきたはずの雨を伴う嵐、つまり「水」の猛威だった。あの日の感動が、自然の厳しさへの驚きへと変わった瞬間を、今も忘れることができない。

それから二年後。中学三年生になった僕は、皆既月食を見た。雲の合間から現れた赤黒い月は、まるで宇宙に浮かぶ小さな細胞のように見えた。そのとき、ふとあの夏の記憶がよみがえってきた。宇宙には雨も降らなければ、木も育たない。けれど地球では、水が命を育み、時にそれを奪い、そしてまた新しい命を生み出す。その激しくも美しい循環の中で、僕たちは生きている。

今、日本各地で豪雨や台風による被害が相次ぎ、気象の激しさが増している。三千年の杉を倒したあの嵐は、決して特別な出来事ではなく、僕たちのすぐそばで起こりうる現実なのかもしれない。種子島で見た「未来へ向かう科学の力」と、屋久島で感じた「自然の圧倒的な存在」。一見別々にみえたこの二つは、僕の中で一本の線としてつながった。

ロケットを飛ばすエネルギーも、森を育てる力も、そして僕たちの体の中をめぐるものも、すべては地球という限られた場所にある「一滴」の水だ。

僕はこれからも宇宙を学び続けたい。でも、遠くの星を見上げるだけでなく、この地球で生きている自分の生活とも向き合っていきたい。

四月から自転車のルールが変わって、雨の日の通学は少し大変になってしまった。顔に当たる雨を感じながらペダルをこいでいるとふと屋久島の森を思い出す。わずらわしいと感じていたこの雨も、あの森を育て、時には命を奪う力にもなる、この地球の「一滴」の水なのだと思うと、見え方が少し変わった気がする。

天文部で空を見上げるその時間に、遠くの宇宙だけでなく、足元にある水のことも忘れずにいたい。そんなふうに、世界を見られる人になりたいと思う。

入　選

私のこだわりと気持ち

広島県立広島南特別支援学校中学部　三年　沖田　蒼介

私は手洗いに対して、他の人よりこだわって生活しています。そのきっかけはコロナ禍の影響で手洗いしなければならないと思い始めたからです。私は、汚いと思ったら、絶対に手洗いしなければならないと思っています。その理由は掃除ロッカー、ゴミ箱など汚いと思っている物を触ったり、トイレに行ったりすると、目には見えない菌がつくので、手洗いしないと気持ちよくならないからです。また、きれいな手だと物を触りやすいですが、汚い手だと物を触りたくなく、躊躇してしまいます。「衛生」は私にとっては唾液や細菌が浄化されている状態だと思います。

しかし、私がよく手洗いをしていることで、他の人から

「手洗いを何度も行ったり、長時間手洗いしたりすると、水がもったいない。」

「手を洗わなくてもそんなに汚れていない。」

「手を洗いすぎると、皮膚が荒れて逆効果になる。」

「汚くても舐めたりしなければ、口に菌が入らないから、たびたび手を洗わなくても大丈夫。」

などと言われたことがありました。

そこで、水の大切さを考えながら清潔を保つために、手洗いの水をどのように使ったらいいかと考えました。その結果、解決する方法を二つ考えました。一つ目は手を洗う時間を決めることです。手洗い時間が短すぎると清潔にならないし、長すぎると水がもったいないので、手洗い時間を三十秒にすれば、長すぎず、水がもったいなくないです。二つ目は洗う回数が多くならないように心掛けることです。畑の作業をした後、家に帰って学校の物を触った時、トイレの後、給食の前後は洗わなければならないと思いますが、これ以外の時は必ずしも手洗いをしなくていいと思います。このように、洗う時間と手洗いをする場面を自分で考えればいいと思います。

また、清潔な水道水を作れるのは日本しかないと聞き、清潔な水を作っている方々への感謝の気持ちも膨らみました。

私はこれから、綺麗な水を作ってくれる人への感謝の気持ちや水の大切さを感じながら、丁度いい手洗いをしていきたいです。

入　選

人と水の関係

学校法人盈進学園盈進中学校　二年　北　晃司郎

水。それは僕たちにとって、生き物にとって、かけがえのないものだと思う。ニュースでも水不足の話題が取り上げられている。だが最近、水が大切にされていない気がする。

僕は釣りが好きだ。週末などに家族や友達と釣りに行くことがある。だが、最近海に行って思うことがある。それはポイ捨てだ。海にたくさんのゴミが浮かんでいたり、水が汚れていたりする。それを見ると小学生の頃に社会で学んだ水質汚染問題が頭に浮かぶ。

水質汚染は僕たちの暮らしから起きるものである。昔は工場の排水や生活排水をそのまま川に流したりして、そこから魚が病気になり、その魚を人が食べ、病気になったりする。最近は、浄水場などで綺麗にされてから川に流されるが、だからと言って水をどんどん汚して、無駄遣いするのはダメなことだと思う。さらに、海にゴミを捨てたりするとゴミを回収するのが難しくなると思う。そうなると生態系にも影響が出る。例えば、漁師の網が流れて亀などに絡まっている映像を僕は見たことがある。僕はそれを見てひどく心が痛んだ。人が無責任に捨てたものが関係のない生き物の命を奪っているのだ。そのようなことはきっと確認されていないだけでたくさん起こっているだろう。人の自分勝手な行動で無駄に命を減らさないためにもせめて、自分だけは絶対ゴミを捨てたり、自然を破壊するような行為は絶対にしないと心に決めた。そして、なるべく多くの人にこの現状を知ってもらいたい。僕たちが生きていけるのは水があり、生き物がいるからである。人間が一番だ。ちょっとぐらいなら殺してもいい。そういう考えを持っている人が少しでも減ってくれたらいいと思う。

入　選

白いお米

学校法人盈進学園盈進中学校　二年　中島　瑞葵

私たちの生活の中で、水はあまりにも身近な存在です。喉が渇けば蛇口をひねり、当たり前のように透き通った水を飲みます。夕食の時間になれば、ふっくらと炊き上がった白いごはんが食卓に並びます。しかし、この「当たり前」の日常が、かつては当たり前ではなかった歴史があることを、私は小学生の時初めて知りました。それは、富山県で発生した四大公害病の一つ、「イタイイタイ病」の歴史です。

かつて、神通川流域の人々は、川の水を生活用水として使い、その水で育てたお米を食べて暮らしていました。しかし、上流の鉱山から排出されたカドミウムが川を汚染し、その水が田んぼに入り込むことで、土壌やお米までもが毒されていきました。

「イタイ、イタイ」と泣き叫ぶほどの激痛に襲われ、骨がもろくなって少しの衝撃で折れてしまう。そんな恐ろしい病気が、私たちの生活する上で必要不可欠な水によって引き起こされたという事実に、私は大きな衝撃を受けました。当時の人々にとって、水はもはや恵みではなく、静かに忍び寄る恐怖の対象だったのかもしれません。

その後、多くの人々の努力によって、汚染された土壌の復元が進められました。膨大な時間と労力をかけて田んぼの土を入れ替え、川の安全を守るための厳しい基準が設けられました。

現在、私が食べているお米が安全で美味しいのは、決して偶然ではありません。過去の悲劇を繰り返さないという強い決意のもと、環境を守り続けてきた人たちの闘いがあったからです。

今となっては、綺麗な水が田んぼを満たし、農家の方々が大切に育ててくれる。その一連の流れの根底には、かつての教訓が深く刻まれているのだと感じます。

今日、私の目の前にあるごはんの白さは、水の清らかさの証明でもあります。一口噛みしめるごとに広がる甘みは、健康な土壌と安全な水があって初めて生まれるものだと痛感しました。

「美味しい」と感じられること。それは、体が健康であることの証であり、食べるものが安全であることの証でもあります。イタイイタイ病の歴史を知ることで、私は一杯のごはんに対する見方が変わりました。それは単なる食事ではなく、守り抜かれた「水の安全」の結晶なのです。私たちは、この澄んだ水を未来へ繋いでいく責任があります。一度汚してしまった環境を取り戻すことがどれほど困難か、歴史が教えてくれています。私はこれからも、蛇口から出る一滴の水、そして食卓に並ぶお米に感謝し、この豊かな環境を大切に守っていきたいと思います。

入　選

MIZU

近畿大学附属広島中学校東広島校　三年　信木　亨治

水、それは人の求める幻想だ。
透き通っていて、ひんやりと心地よい。
時に冷たく、時に温かく、それは現実の様だ。
幻想の様で現実の様、そんな二面性を持っているのだろう。
水、平仮名で書くと「みず」。これを漢字に直すと「見ず」にも「水」にも「未ず」にもなる。
人は社会に『未来を見通せる透明さ』を求める。
水のように透明な社会を望んでいる。
しかし、その人の心は泥水の様に濁っている。
私は思う。人は傲慢な生き物だと。
人は勘違いをしている。
自らはこの世のすべてを掌握できると。
しかし、現実は違う。
人は水が無ければ生きていけない。
それこそ現実を「見ず」というものだ。
世の中が、人の心が水の様に透き通っていればいい。
しかし、現実はそうでない。
人の心は泥水のように濁っている。
そんな人の心も水で洗い流せばいい。
でも、それじゃあ、あっけない。
真っ黒で、時に白くなって、それでこそ人間なのだと私は思う。
　水、それは理想的な人間だ。
水のように透明で透き通った人間は理想的だと言えるだろう。
しかし、理想的なだけでは人間とは言えない。
完璧な人間など存在しないのだから。
私は思う。人は傲慢な生き物だと。
人は完璧な人間を求める。
しかし、完璧に近い人間を見ると、「面白味がない」、「それじゃあ成長がない」などと勝手なことを言う。
人のそんなところが泥水のように濁っていて、泥臭く感じられるのだろう。
人の浄化、社会の浄化、そんなことは必要だろうか。
泥臭くて、真っ黒で、それでこそ人間だと、社会なのだと、私は思う。
それがもし、健全なもので無いのならばそんな世の中を、人を作った時代を浄化すべきだと私は思う。
　水、それはまるで水晶のようだ。
水晶は人の心を見るのに使われる。
その透き通った美しい球体は水の雫のように見える。
人の心が水晶に映ると水晶は真っ黒になる。
心の穢れや気の迷いに水晶は敏感なのだ。
水もまた、そうなのだろう。
人間の住んでいる近くの海や川は汚れている。
それは、人の心の穢れを吸収しているからではないかと、私は思う。
つまり、水は人を浄化しているのだ。
そんな水の存在に人間は気付いていない。
なんて、傲慢な生き物なのだろう。
自らを育んでくれたこの自然を、水を、蔑ろにして、自らの利益だけを優先する。
これでは、水がどれだけ人の穢れを吸収したところで焼け石に水だ。
私は思う。人間という生き物は自然を、水をもっと大切にすべきだと。
自分たちの生活がどれほどの自然を破壊しているのかを知るべきであると。
　私は思う。「自然は勝手に汚れるんじゃない。自分たちが穢しているんだ。」
自分たちを育んでくれたこの自然に、水に、もっと感謝の意を行動で示すべきだと。
それをしないなんて、人は傲慢な生き物だ。

私は思う。水はこの世の何よりも美しいと。
そんな水が、自然が浄化される日が来ることを望む。

入　選

広島の水の未来

学校法人盈進学園盈進中学校　三年　原田　祐埜

　私達人間は当たり前のように蛇口から水が出てくる。今の時代、地球温暖化、災害の激甚化、などさまざまな環境問題が深刻化してるが、私は、一つのニュースに目がついた。

私の住んでいる広島県では7月下旬～8月上旬頃からまとまった雨が降らなくなり、現在ダムの貯水率が約51％である。そのため、工業用水、農業用水の取水制限をされている。一方で森林の減少や土地開発により、雨水が地下に浸透しにくくなり、水資源の自然な循環が妨げられている。このような状況は、将来私たちの生活に影響をもたらすようになる。私が住んでいる所の対策を調べてみると、さまざまな取り組みが行われている。例えば、水の再利用や節水意識の向上を目的とした啓発活動が進められ、家庭や企業において節水型の設備を導入するなど、無駄な水の使用を控えることが求められている。

そんな取り組みや問題がある中、私はシャワーや歯磨きなど全然節水をしていない。調べてみたら、蛇口10秒で2～3リットルでる。私たち一人一人が節水すれば1日に莫大な水を節水できるようになる。だから、私たち一人一人の意識も重要である。水は限りある資源であり、当たり前のように使えるものではない。日常生活の中でこまめに蛇口を閉める、雨水を有効活用するなど、小さな行動の積み重ねが大きな効果を生む。こうした意識の変化が、地球全体の水資源の保全につながる。貯水問題は、自然環境と人間活動が密接に関わる課題であり、短期間で解決できるものではない。しかし、行政の取り組みと私達の協力が一体となることで、持続可能な水利用の実現に近づくことができる。今後も水の大切さを再認識し、将来の世代に安心して水を引き継ぐための努力が求められている。そのために私は、水を使う時は、節水を意識し、水を引き継ぐよう、水と自然環境を大事にしていきたい。

「命は僕の原点」

学校法人盈進学園盈進中学校　三年　松川　莉大

僕が所属する環境化学研究部では、定期的に地域の川へ行き、そこに住む魚を採取して水質を調べるという調査をしている。普段、僕たちは蛇口をひねれば当たり前に出て来る綺麗な水を、あって当たり前だと思っている。しかし、実際川に入り、流れに身を任せて魚と向き合う時間は、僕に「水」という存在の深さを教えてくれた。

　川の冷たい水に足を浸すと、水の圧力や流れが直接伝わってきた。一見すると透き通って見える水だが、場所によっては少し濁っていたり、変な匂いがしたりする所もあった。僕たちはそこで網を使い、カニやカワムツ、石の影に潜む貝などを捕まえた。こうした生き物たちは、その川の水の健康状態を教えてくれる。汚い水を好む魚がそこにいるということは、その川の水が助けを求めている証拠なのだ。

　化学と環境を学ぶ僕にとって、水は単なる物質ではない。それは、様々な命を繋いで、循環させる川の魂だ。もしも環境が悪化し、汚染が広がれば今僕の手の中で跳ねている命は一瞬で消えてしまう。僕たちは、科学的な数値を見るだけでなく、その向こう側にある尊さを忘れてはならないと感じた。

　川を流れるこの水は、もともと山に降った雨が地層で磨かれて、地上に現れたものだ。そして今、魚たちのエラを通って、やがて海へと流れ着いて、もう一度空へと還っていく。部屋のビーカーの中にある水も、川で生き物を育む水も、全て地球を巡る大きな循環の一部だと僕は思う。そう考えると、目の前の一滴一滴がとても愛おしくて、また責任あるものに見えてくる。

　しかし、調査中では川底に沈んだ空き缶や、水面に油の膜も見つけた。僕たちが何気なく流した汚れは、水の循環の輪を傷つけていたんだと分かった。水は水自身を浄化する力を持っているが、それにも限界がある。僕たちは、水からの恩恵を受けるだけでなく、その質を守る義務があると思う。

　川の生き物たちも、そして僕たち人間も健全な水の循環がなければ絶対に生きていけない。調査を経て、僕は当たり前だった綺麗な水をこれからも当たり前であり続けさせたいという強い意思を持った。水を大切にするということは、単に節水することだけではない。この豊かな命の源を汚さず、明日へと繋いでいく責任を持つことだ。これからも調査を通じて川の声を聴き、水というかけがえのない宝物を守り続けていきたい。

入　選

心のすみか

広島県立広島叡智学園中学校　三年　村上　ゆき

水、それは私の母であり、友達であり、宝物だ。

水と言われ、私が一番に思い浮かべるのは「海」だ。二〇二四年、私は広島叡智学園に入学し、親元から離れ、寮生活を始めた。人生で初めての親がいない生活は私が想像していた何十倍も辛く、寂しく、苦しいものだった。今までどれだけ家族に支えられていたのかを実感し、右も左もわからない新天地で。私はただ一人、頭を抱えていた。これから待ち構えることへの不安と緊張が込み上げ、目に涙が浮かんでいた。そんなとき、先輩が部屋を訪ねてきて、私を外へ連れ出してくれた。行き先は寮から歩いてすぐの大串海岸だった。私の抱えていた不安と緊張を吹き飛ばすほどの力強くも温かい海風と柔らかい潮の香りに包まれた瞬間、自然と涙が消え、頑張ろうという勇気が湧いてきた。

それから、海は私の中でとても心強く身近な存在になった。学校で課題と責任に追われ、逃げ出したくなった時、人間関係も部活も思うようにいかず諦めたくなった時、私は海へ行った。海を見ていると頭の中が空っぽになり、溢れ出しそうだった感情を鎮めることができた。そして、私に前を向く力をくれた。

それだけではない。休日はよく寮を飛び出して友達と一緒に海へ行き、裸足で海の中を走り回る。一緒に、海にいる生き物を見つけては大はしゃぎしながら、名前を調べたり、写真を撮ったりする。海には私の青春と思い出が詰まっているし、海は私を含む多くの生き物の「心のすみか」なんだろうな、といつも思う。

そんなある日、いつものように友達と一緒に海岸を歩いていると、キラキラと光る「何か」を見つけた。貝殻か?それとも石か?否、違う。近づいてみると、それはプラスチックのペットボトルだった。衝撃的だった。私の「心のすみか」にゴミが落ちている。怒りでもない、悲しみでもない、悔しさでもない、なんとも言い表せない感情が込み上げてきた。

その日調べてみると、世界には一億五〇〇〇万トン以上のプラスチックゴミがあり、その原因の多くは「ポイ捨て」であるということがわかった。たった一人の「まあ、いっか」が世界中の海を傷つけている。この現実に私は心が痛んだ。

今、私達の海がごみで溢れようとしている。今、海の生物が命を落としかけている。美しい海が消える。これは、遠い未来の話ではなく、刻一刻と私達に迫っている重大な問題なのだ。

私は今、この問題の重大さに気付いたが、世界の人々はどうだろう。自分達の目の前にある美しい海を見て「まだ大丈夫だ」と安堵しているのではないか。私の大切な宝物を守るために、みんなの「心のすみか」、母なる海を守るために、私達一人一人が行動を起こし、変えていかなければならない。

そこで私は、海の近くにあるアイス自販機周辺にゴミ箱が置かれていないことに気づいた。アイスを買って海へ向かう生徒が、アイスのゴミをポイ捨てしているのではないか。この問題を解決するために、私は今、友達と一緒に学校にある廃材を使ってゴミ箱を作り、設置しようと考えている。また、海にゴミを見つけたら、拾って持ち帰り、分別して捨てるようにしている。

私達の「心のすみか」を守るのは他でもない私達自身だ。私は今まで幾度となく海に救われてきた。だから、今度は私が海を救い、恩返しをしたい。私が守りたいのは、波の音に、潮の香りに励まされたあの日の記憶だ。だからこそ今、海を守るために動きたい。私達の「心のすみか」を未来へつなぐために。今日も私は海岸に立つ。潮風に願いを乗せながら。